

千葉



千葉総局

〒260-0013
千葉市中央区中央
4-17-3

☎ 043・225・2171
FAX 043・226・1782
chiba@sankei.co.jp

広告 043・202・8600

購読申し込み

0120・81・2950

配達・集金

0120・34・4646

紙面・記事

03・3275・8864

Web

http://sankei.jp.msn.com/region/region.htm

あすのこよみ

(30日)

旧7月13日

《先勝》



月齢	12.5
日出	5:07
日入	18:07
月出	17:01
月入	3:27
満潮	3:28
	16:46
干潮	10:08
	22:26
中潮	(千葉)

日大「インド産」に活用

食べた後は廃棄される落花生の殻ごみ(さや)。さやを建材などに使える板に再生する技術を開発した日本大学生産工学部(習志野市)が、生産量世界第2位のインドで生産された落花生に同技術を活用しようと、インド工科大学と共同で研究を始めた。生産量1位の中国からも関心が寄せられており、技術が確立されれば「エコだけでなく商業としても成り立つ」(日大)と期待を寄せている。

日大生産工学部は2年前に、県産落花生を用いた板の

落花生のさや再生技術

成型技術を開発した日本大学生産工学部(習志野市)と共同で開発し、特許を出願している。廃材などを活用したパーティクルボードの日本工業規格(JIS)も取得しており、建材などに利用することが可能という。

ただ、同学部の高橋進教授(金属・樹脂成型学)によると、板は細かく砕いたさやに接着剤と水を混ぜ、熱と圧力を加えて作られるが、生産地域や品種によって特徴が異なり、材料の配分や加圧の度合いなども変わってくる。その

ため、インド産落花生のさやを県産と同一の条件下で成型することはできないという。研究はそれぞれの得意分野を両大学が同時並行で進め、より研究を早く進めるため、今秋にも互いに研究員を派遣し合うなどする。来年度末までの技術開発を目指すことも、日大は国内企業と共同で大量生産に向けた成型専用の機械開発にも取り組む方針だ。

一方、生産量が世界全体の約4割を占める中国も同技術に関心を寄せている。高橋教

建材などに利用 現地大学と共同研究

授が昨年に国際会議で中国・青島を訪れた際、現地で商業ベースでの話を打診され、マスコミからも取材を受けたという。中国で技術を導入する場合、インドと同様に研究が必要となるが、高橋教授は「中国で落花生が生産されているのは海に近い地域が多く、製品の運輸に便利」と開発に意欲的だ。

落花生は中国とインドで世界の半分以上の生産量を占めており、それぞれで技術が確立されれば資源の有効活用と産業の両面で貢献度は大きい。高橋教授は「将来的に国際規格の取得を目指し、製品を世界中で流通させたい」としている。



漁港(和義撮影)

判を含め、党の名誉や信用を失墜するような行為に及んだ」としている。佐藤県議は17日の会見で「維新の会の政策実行力、スピード

感じた」などと述べ、離党届提出を表明していた。

実質収支で黒字確保

千葉市決算見込み